

# 本当にこれでいいの？ 日本の奨学金

大学の学費の高騰と家計収入の減少により、奨学金に頼らなければ大学に進学できない学生が半数を超えるようになりました。卒業しても、不安定な雇用で十分な収入が得られず、奨学金を「返したくても返せない」人たちが増加しています。社会人としてのスタートラインから数百万の借金を背負うのは、大変な重荷です。進学を諦めたり、返済が負担になって結婚や出産をためらわせる要因ともなっています。これは、本人だけでなく、社会にとっても大きな損失です。貧困の連鎖を絶ち、教育の機会均等を実現するとともに、少子化・人口減に歯止めをかけて持続可能な社会にするためにも、奨学金問題の早急な改善が必要です。

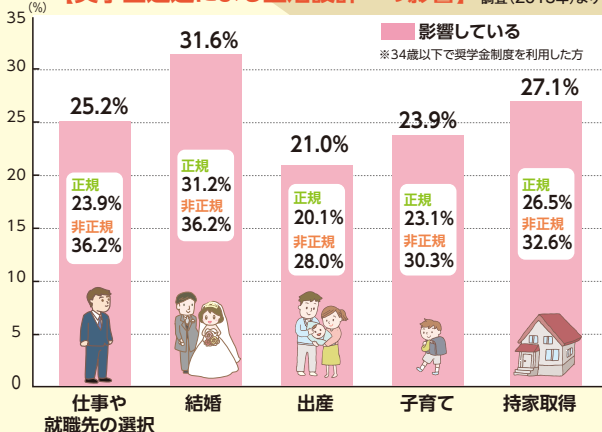
## 可能性を広げるはずの奨学金なのに…



## 返済が結婚や出産などにも影響

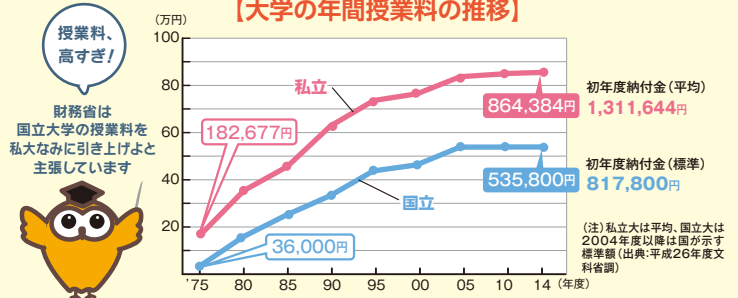
20～30代前半では、奨学金返済が生活設計に影響しているとの回答が、いずれも2～3割に達しています。若い世代ほど影響度が高く、将来への見通しが立ちにくくなっています。

【奨学金返済による生活設計への影響】 中央労働協安アンケート調査(2015年)より

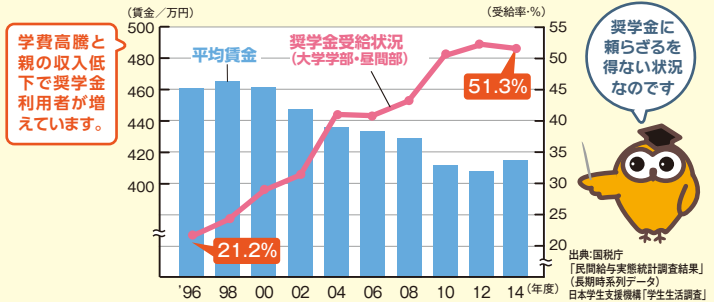


## 奨学金に頼らなければ進学できない

【大学の年間授業料の推移】



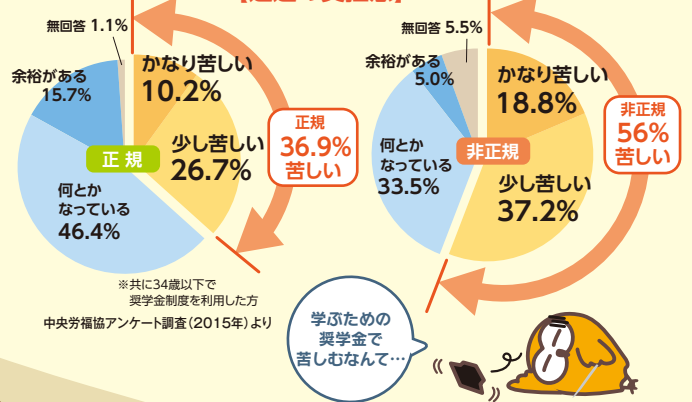
【民間平均賃金と奨学金受給率】



## 借金を背負って社会へ — 苦しい奨学金の返済

返還が「苦しい」とする人は全体で4割弱、非正規労働者では56%と半数を超えています。また年収300万円未満では5割前後、借入額500万円以上では6割の人が「苦しい」と回答しています。低賃金・不安定雇用が続く現在の社会では、苦しい返済を強いられます。

【返還の負担感】



個人の努力だけでは、もう限界。